


EXTRACTION OF POLY3-OXY BUTYRIC ACID FROM BACTERIAL CELL

Patent Number: JP55118394
Publication date: 1980-09-11
Inventor(s): POORU AASAA HORUMUSU; REONARUDO FUREDERITSUKU RAITO; BARII ARUDAASON;
PIITAA JIEEMUSU SENIAA
Applicant(s): ICI LTD
Requested Patent:  JP55118394
Application Number: JP19800021041 19800221
Priority Number (s): GB19790006076 19790221
IPC Classification: C12P7/52; C12R1/38
EC Classification:
Equivalents: ZA8000803

Abstract

Data supplied from the esp@cenet database - I2

⑨ 日本国特許庁 (JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭55—118394

⑤ Int. Cl.³
C 12 P 7/52
C 12 R 1/38

識別記号

庁内整理番号
6760—4B
6760—4B

⑬ 公開 昭和55年(1980)9月11日
発明の数 2
審査請求 未請求

(全 10 頁)

⑭ 菌体からのポリ-3-オキシ酪酸の抽出方法

① 特 願 昭55—21041

② 出 願 昭55(1980)2月21日

優先権主張 ③ 1979年2月21日 ③ イギリス
(GB) ④ 7906076

⑦ 発 明 者 ポール・アーサー・ホルムス
イギリス国クリーブランド・ス
トックトン・オン・テイス・
ノートン・ザ・グリーン・ノー
トン・ホール (番地なし)

⑧ 発 明 者 レオナルド・フレデリック・ラ
イト

④ 出 願 人 インペリアル・ケミカル・イン
ダストリーズ・リミテッド
イギリス国ロンドン市エスダブ
リユー1ビー3ジェイエフ・ミ
ルバンク・インペリアル・ケミ
カル・ハウス (番地なし)

⑥ 代 理 人 弁理士 湯浅恭三 外2名
最終頁に続く

明 細 書

1. [発 明 の 名 称]

菌体からのポリ-3-オキシ酪酸の抽出方法

2. [特 許 請 求 の 範 囲]

(3) ポリ-3-オキシ酪酸含有菌体の水性懸濁液から、ポリ-3-オキシ酪酸を抽出するに際して、微細な滴状にされた形態の該水性懸濁液を、少なくとも100℃に加熱した気体流中へ導入して懸濁液から水を蒸発させ、得られる乾燥菌体を捕集し；菌体中のポリ-3-オキシ酪酸に対する溶媒である液体の抽出溶媒と接触させることにより乾燥菌体からポリ-3-オキシ酪酸を抽出し；そしてポリ-3-オキシ酪酸を溶解して含む抽出溶媒を菌体残渣から分離する；ことからなる菌体からのポリ-3-オキシ酪酸の抽出方法。

(2) 乾燥菌体を抽出溶媒と接触させるに先立つて、ポリ-3-オキシ酪酸を溶解しえないが菌体中の脂質および/または色素が存在する場合にはその色素を溶解しうる液体と乾燥菌体を接触させる特許請求の範囲第1項記載の方法。

(1)

(3) ポリ-3-オキシ酪酸を溶解しえない該液体はアセトンまたはメタノールである特許請求の範囲第2項記載の方法。

(4) 乾燥用の気体は100～500℃の範囲の温度に加熱される特許請求の範囲第1～8項のいずれかに記載の方法。

(5) 抽出溶媒は部分ハロゲン化炭化水素である特許請求の範囲第1～4項のいずれかに記載の方法。

(6) 抽出溶媒は1,2-ジクロロエタン、ジクロロメタンまたはクロロホルムである特許請求の範囲第5項記載の方法。

(7) 乾燥菌体を40℃以上の温度で抽出溶媒と接触させる特許請求の範囲第1～8項のいずれかに記載の方法。

(8) 抽出溶媒の重量は菌体乾燥重量の10～100倍である特許請求の範囲第1～7項のいずれかに記載の方法。

(9) ポリ-3-オキシ酪酸含有菌体からポリ-3-オキシ酪酸を抽出するに際して、該菌体を1,2-ジクロロエタンと接触させ、ポリ-3-オキシ

(2)

酪酸含有溶媒相を菌体残渣から分離することからなる菌体からのポリ-8-オキシン酪酸の抽出方法。

(10) 菌体を1,2-ジクロルエタンと接触させるのに先立つて、菌体の水性懸濁液を菌体破壊工程に付す特許請求の範囲第9項記載の方法。

(11) 1,2-ジクロルエタンを菌体の水性懸濁液と接触させる特許請求の範囲第9または10項に記載の方法。

(12) 菌体を10~40℃の温度で1,2-ジクロルエタンと接触させる特許請求の範囲第10または11項記載の方法。

(13) 1,2-ジクロルエタンとの接触に先立つて、水性懸濁液のpHを、菌体の等電点pH値または菌体を菌体破壊工程に付す場合には破壊菌体の等電点pH値のプラス・マイナス0.5の範囲内に調節する特許請求の範囲第11項記載の方法。

(14) ポリ-8-オキシン酪酸の抽出溶媒からの分離は、ポリ-8-オキシン酪酸を溶解することができないが抽出溶媒と混和性である液体中でポリ-8-オキシン酪酸を沈澱させることにより行い特許請

(3)

の細菌、例えばシュエドモナダセアエ(*Pseudomonadaceae*)は、より強固な菌体を有し、菌体破壊処理をしてから抽出溶媒と接触する必要がある。

従来提案された抽出法には、水性培地から例えば遠心分離により、菌体を採取して湿潤菌体マスを得る工程が含まれ、これをアセトンと接触させて乾燥および菌体破壊を行う。そのアセトンの除去後に、PHBを適当な溶媒、例えばピリジン(米国特許第8086959号)またはジクロルエタン/エタノール混合物(米国特許第3044942号)で抽出する。かかる方法は、アセトンが乾燥および菌体破壊効果を有すると共に、脂質および色素を抽出するので有利である。そのような脂質および色素が存在すれば製品の純度が低下することになる。しかし、乾燥および菌体破壊を行うためのアセトンでの湿潤菌体の処理は大規模の場合には経済的でない。

別の方法は米国特許第3275610号明細書に記載されており、この方法では菌体の水中懸濁

(5)

求の範囲第1~14項のいずれかに記載の方法。

3.〔発明の詳細な説明〕

本発明は抽出方法、特に微生物菌体からのポリ-8-オキシン酪酸(以下、PHBと称することがある)の抽出方法に関する。

1920年代から、多くの微生物がその菌体内にPHB顆粒をエネルギー貯蓄物質として蓄積していることは知られている。米国特許第3107172号明細書には、そのようなPHB含有菌体を例えば噴霧乾燥によつて乾燥し、得られた乾燥菌体を成形用組成物として使用することが提案されている。菌体からPHBを抽出し、それをプラスチック物質として使用するといういくつかの提案もなされているが、従来開示された方法は経済的に許容されてきていない。

PHBを抽出するには、一般的には菌体をPHB可溶性溶媒と接触させPHBを残部の菌体物質から浸出させることが必要である。若干の細菌、例えばアゾトバクター属の細菌はそのPHBを容易に抽出溶媒に対して放出するが、一方ではその他

(4)

液を超音波振動に付して菌体を破壊し、次いで遠心分離し、乾燥してから、クロロホルムのような溶媒で抽出する。そのクロロホルム溶液からのPHBの分離後にそのPHBを脂質抽出除去のために洗浄する。

また米国特許第4101583号明細書には、乾燥菌体から、または培養液から遠心分離により採取した湿潤菌体から直接に、菌体のある種の環式カーボネート溶媒と共に加熱することにより抽出することも提案されている。

培養により得られた水性菌体懸濁液から直接に(好ましくはある程度の濃縮後)、ある種の溶媒、例えばクロロホルム、ジクロルメタンまたは1,2-ジクロルメタンと接触させることにより(そして必要な場合にはそのような溶媒との接触前に菌体破壊処理を合せ行い)PHBを抽出することも可能である。しかし、溶媒および抽出条件は、菌体中に存在する非PHB物質、特に脂質および色素(存在するならば)の溶媒による過度の溶解を防ぐような注意をして選択されなければならない。

(6)

そのような非PHB物質は製品(すなわちPHB)の純度を低下させて精製の問題を引き起こすだけでなく、脂質が同時に抽出されることにより溶媒相と水性相との間で比較的安定なエマルジョンを形成し易くかくてそれらの分離を困難にすることがある。そのような直接抽出法では、脂質を抽出する溶媒は脂質と共に、PHB抽出溶媒での接触に先立つて除去されなければならないので別個の脂質抽出処理工程を行わないのが一般的であり、またより効率的な脂質溶媒は水と混和性となり易いので、そのような脂質溶液の除去は実上の困難を引き起こす。

我々は大規模操作に適用できる特に簡単な方法工程によつてPHBを固体から抽出できることを見出した。

本発明によれば、PHB含有固体の水性懸濁液からPHBを抽出する方法であつて、微細な滴状にされた形態の該水性懸濁液を、少なくとも100℃に加熱した気体流中へ導入して懸濁液から水を蒸発させ、得られる乾燥固体を捕集し、固体中の

(7)

エタノール、ブタノール、ヘキサンまたは石油エーテルのような脂質/色素溶媒で抽出し、次いで溶解された脂質/色素を含む溶媒を固体から分離した後、固体をPHB抽出溶媒と接触させることができる。脂質/色素抽出は乾燥固体をその溶媒で還流することにより行なうのが好ましい。アセトンおよびメタノールは好ましい脂質抽出溶媒である。脂質/色素抽出溶媒は別のPHB非溶媒例えばジエチルエーテルと混合して用いることもできる。

かかる脂質抽出によつて、固体のある程度の弱化も起こり、かくして次工程のPHB抽出を助長しうることは了解されよう。

本発明方法においては、固体懸濁液を微細な滴状(例えば噴霧または微細蒸気状)で少なくとも100℃の温度の気体流(例えば空気)中へ導入することからなる乾燥処理によつて、固体は水性懸濁液から分離される。好ましくは、懸濁液は、スプレーまたはアトマイザーノズルを介して導入する。かかる乾燥処理は周知であり、例えば噴霧

(8)

PHBに対する溶媒である液体の抽出溶媒と接触させることにより乾燥固体からPHBを抽出し、そしてPHBを溶解して含む抽出溶媒を固体残渣から分離することを特徴とする固体からのPHBの抽出方法が提供される。

我々にかかる乾燥式の方法は固体を十分に弱化させて、何ら別個の固体破壊処理工程を必要とすることなくPHBを抽出可能にすることを発見した。特に強固な細菌については、例えばミーリングのような別個の固体破壊処理工程を行なつてから乾燥処理することはPHBの抽出収率の増加のためには望ましいけれども、我々は乾燥処理前のそのような別個の固体破壊処理は必ずしも必要ではなく、実際には、ミーリング処理懸濁液の乾燥処理によつて乾燥器中における堆積のような問題を生ずるので、可能ならばそのような処理を行わないのが最良である。

本発明の方法においては、固体を脂質抽出処理に付してからPHB抽出溶媒と接触させるのが好ましい。従つて乾燥固体をアセトン、メタノール、

(9)

乾燥法およびフラッシュ乾燥法がある。

加熱気体導入口温度は100～500℃であつてよいが、好ましくは120～250℃である。

加熱気体流によつて水分が蒸発除去され、この水分は気体流で運び去られて、残つた乾燥固体は捕集されて、PHB抽出溶媒による抽出工程へ送られる。

適当なPHB抽出溶媒の例としては、ピリジン、環式カーボネート化合物、および特に部分塩素化炭化水素類(例えばクロロホルム、ジクロルメタンおよび1,2-ジクロルエタン)がある。1,2-ジクロルエタンは通常PHBの溶媒とは考えられず、この理由はPHBが固体から離れた後には1,2-ジクロルエタン中に容易にまたは完全に溶解しないからである。従つて固体残渣から分離されたPHB溶液は単一相であるように見えるが、沈殿後に1,2-ジクロルエタン中にPHBを再溶解させることによつて作つた溶液は(極めて稀薄な場合を除き)、パール模様の白色の外観を呈し、従つて一旦沈殿され、乾燥されたPHBは

(10)

1, 2-ジクロロエタン中には容易には再溶解しない。従つて、そのような溶媒が固体からのPHBの抽出に有効であることは驚くべきことである。

1, 2-ジクロロエタンは乾燥固体からPHBを抽出するのに用いるのに適当な溶媒であるばかりでなく、以下に述べるように、1, 2-ジクロロエタンはある条件下では水性固体懸濁液からPHBを直接に抽出するのに用いても抽出されるPHBが同時抽出される物質で純度低下するようなことはほとんどない。従つて本発明の一態様によれば、PHB含有固体からPHBを抽出する方法であつて、固体を1, 2-ジクロロエタンと接触させ、PHB含有溶媒相を固体残渣から分離することを特徴とするPHB抽出法が提供される。

水性固体懸濁液を抽出溶媒としての1, 2-ジクロロエタンと接触させる(もし強固な細胞を用いる場合にはミーリングまたは他の固体破壊処理後にこれを行なう)直接抽出法においては、抽出溶媒の温度は40℃以下としてその溶媒による非PHB物質の過度の抽出を防ぐようにすべきであ

(11)

いと粗PHBの抽出効率が低くなり、過大な粘度の溶液が得られることがあり、他方溶媒の量が多いと不経済である。溶媒の量は、抽出溶液が0.5~5%、好ましくは1~2% (重量)のPHBを含むような量であるのが好ましい。

抽出のための接触時間は、不経済的に長くならずに適正な抽出が達成されるような妥協によつて決定される。

抽出溶媒との接触前に固体を乾燥させる場合には、PHB含有溶液からの固体残渣の分離は簡単な浮遊または遠心分離処理によつて行なうことができる。固体を脂質抽出処理に付してからPHB抽出を行なう場合には、固体残渣からのPHB含有溶液の浮遊は特に容易となり易く、従つて比較的粗いフィルターを用いて行なうことができる。固体の水性懸濁液を1, 2-ジクロロエタンと接触させてPHBを抽出する場合には、固体残渣は水性相(固体残渣は水性相中に懸濁している)から1, 2-ジクロロエタン相(PHBが溶解されている)を分離することにより除去できる。安定

(13)

る。これとは対照的に、前述のように固体を乾燥させてから溶媒と接触させる場合には、抽出は40℃以上の温度で実施するのが好ましい。従つて、溶媒の沸点までの温度(沸点を含む)を使用することができ、大気圧以上の圧力を用いて大気圧における溶媒沸点よりも、高い温度を使用するよりに行なうことができる。

固体を抽出処理前に乾燥する場合(前述のような理由で好ましくない)、固体懸濁液を固体破壊処理(例えばミーリング処理)に付してから乾燥する。抽出温度は40℃以下として脂質の過度の抽出を防ぐべきである。従つて、もし、ミーリング処理懸濁液を乾燥し、熱溶媒で抽出するならば、溶媒からのPHBの沈殿の際に、セラチン状の粘着性物が形成され易い。しかし脂質抽出処理を行なつてからPHB溶媒と接触させる場合には、PHB溶媒での抽出は40℃以上の温度で行なうことができる。

使用するPHB溶媒重量は固体乾燥重量の10~100倍であるのが好ましい。溶媒の量が少な

(12)

エマルジョンが形成されることがあるので1, 2-ジクロロエタン相を水性相から分離するのが困難となることが時々ある。若干の場合には遠心分離によつてそのような分離は促進されるけれども、大規模操作では遠心分離は必ずしも効果的でなく、好適でないこともある。

我々は、溶媒と水性相との分離は、抽出溶媒1, 2-ジクロロエタンとの接触に先立つて、水性相のpHを固体の等電点のpH値のプラス・マイナス0.5の範囲内に調節することによつて促進されることを見出した。以下に述べるように、若干の固体については、固体水性懸濁液と1, 2-ジクロロエタンとの接触に先立つて固体を破壊するのが望ましい。破壊固体の等電点は未破壊固体の等電点と異なることがある。固体が破壊される場合には、pHは破壊固体の等電点pH値のプラス・マイナス0.5の範囲内に調節すべきである。固体破壊に先立つて固体懸濁液に充分なpH調節剤を添加して、破壊の際に破壊固体の等電点pH値のプラス・マイナス0.5の範囲内のpHを得る

(14)

こともできるけれども、菌体破壊処理後に pH を調節するのが好ましい。

菌体の等電点は、菌体が固定的な陽または陰電荷を有しない pH 値、すなわち菌体が電氣的に中和している pH 値である。等電点は、種々の pH 値での粒子電気泳動を測定して決定することができる、かくして電荷がゼロとなる pH が求められる。

一般に PHB 蓄積性細菌については、その未破壊および破壊菌体の両者の等電点は pH 4～5.5 の範囲である。しかし培養中の水性培地の pH は一般に 6～8 の範囲であり、その至適値は使用細菌の種類やその他の培養条件によつて左右される。上述のように水性培地の pH は等電点 pH の 0.5 以内に調節されるべきである。好ましくは等電点の 0.25 pH 単位内に、殊に等電点プラス 0.25 pH 単位内に調節される。かかる pH 調節は、菌体を乾燥してから PHB 抽出溶媒と接触させる場合には必要でないことは明かであろう。

菌体残渣からの PHB 含有抽出溶媒の分離後、その PHB 溶液は、所望ならば、さらに濾過して

(15)

懸濁細菌片を除去してもよい。かかる濾過は、5 μm 以下、好ましくは 2 μm 以下の孔寸法のフィルター、例えばガラスファイバーフィルターを用いて行なうのが好ましい。

分離した PHB 含有溶液は（好ましくは濾過後）、被覆、フィルムまたは繊維のようなソルベント注型物品の製造のために直接使用することができ、あるいはさらにそれを処理して、（例えば溶媒の蒸発により、または PHB を溶解しないが溶媒とは混和性である液体中へ PHB 含有溶液を添加して沈澱させることにより）固体 PHB を分離することもできる。そのような沈澱用の液体の例としては、石油エーテルおよびメタノール/水混液がある。 PHB は、所望により、メタノールまたはアセトンで洗浄することにより精製できる。

PHB の抽出後の菌体残渣は、さらに加工して他の用途、例えば食品（飼料）または肥料に用いることができる。

PHB 蓄積能を有するいずれの細菌も PHB 含有菌体の生産に使用しうる。「アドバンス・イン・

(16)

マイクロバイアル・フィジオロジー」1978, 10, 208～266 のシニア等の論文には 1972 年 6 月までに発表された細菌が挙げられている。その他の細菌は米国特許第 3072588 号にリゾビウム突然変異菌、英国特許第 1535682 号に特にアルカリグネス・ユウトロファス、バシラス・ノガテリウム、ゾオグロエア・ラミグラおよびマイコプラナ・ルブラの突然変異株が記載されている。好ましいものの中でも、アゾトバクター属（特にクロオコキウム種）、アルカリグネス属（特にユウトロファス種）およびシユードモナダセア属、特にシユードモナス $AM1$ およびメチロバクテリウム・オルガノフィラム種を挙げることができる。

それらの細菌の中でも好ましいものは、多くの基質例えば炭水化物、エタノール、メタノール、多価アルコール、二酸化炭素/水素およびカルボン酸のうちの 1 またはそれ以上を同化することができ、かつ使用基質に応じて好氣的または嫌氣的に生育しうる細菌である。本発明は、アルコール

(17)

特にメタノールの基質で好氣培養条件下で生育したシユードモナダセア属の菌体からの PHB 分離に特に有用である。本発明はシユークロースまたはグルコースのような水溶性炭水化物で生育したアゾトバクター属の菌体からの PHB 分離にも特に有用である。

培養法によつて得られる菌体懸濁液には、典型的には 20～55 g/l のバイオマスが含まれている。かかる懸濁液が中間の乾燥処理なしで 1,2-ジクロロエタンまたは色素/脂質抽出溶媒と接触されるときには、効率的な抽出のためには、その菌体懸濁液は 5～15 重量%のバイオマス固形分濃度を有するのが好ましい。菌体懸濁液は必要ならば例えば遠心分離によつて濃縮して、上記の濃度範囲とされる。（菌体懸濁液は、培養されたままの状態で既にこの範囲の濃度となつていことがあるけれども、そのような場合でも濃縮するのが好ましいことがある）。

我々は、 PHB を 1,2-ジクロロエタンによつて水性菌体懸濁液から直接に抽出する場合、

(18)

*PHB*は別個の固体破壊処理をする必要なく若干の細菌からは抽出できることを発見した。かくして、アゾトバクター属およびアルカリゲネス属の細菌は1, 2-ジクロロエタン溶媒に対して容易に*PHB*を放出するので、抽出処理には固体懸濁液と溶媒とを攪拌するだけで足りる。この場合の攪拌機は相対運動する隣接表面を有し、かくして緩和な剪断を与えるようなものが好ましい。シルバースン(商標: *Silverson*)ブレンダーは混合するのに使用できる。一層強固な細菌(例えばシユードモナダセア属)は固体破壊のための別個の処理を必要とする。この破壊は水性固体懸濁液を、例えばホモジナイザー、ビーズミリング、ローラーミリングまたはフレンチプレッシングにより剪断することにより行なうことができる。他の固体破壊方法の例としては、浸透圧ショック、音波もしくは超音波振動、および酵素による固体壁分解がある。次亜塩素酸塩で処理して固体膜を化学的に破壊する方法を用いることができるが、普通それにより*PHB*が著しく分解されるので好

(19)

ナショナル・コレクション・オブ・インダストリアル・バクテリアに寄託された菌体の番号である)。

上記ペレットを流動床乾燥器中で40℃で10時間乾燥した。

得られた乾燥菌体の10gを500mlの1, 2-ジクロロエタン中に室温で15分間懸濁させ、次いで溶媒相を遠心分離およびデカンテーションによつて取出した。この溶液を8000mlのメタノール/水混液(容量比メタノール4:水1)に激しく攪拌しながら添加し、粗*PHB*を沈澱させた。この沈澱を濾紙上に捕集し、減圧下50℃で乾燥した。粗*PHB*の収率は0.5%未満であつた。

上記の実験を繰返したが、乾燥菌体を1, 2-ジクロロエタンと共にシルバースン(*Silverson*)ミキサー中で室温で15分間剪断した。粗*PHB*の収率は1.4%であつた。

上記の実験を繰返したが、乾燥菌体を1, 2-ジクロロエタンにより88℃で15分間還流処理した。粗*PHB*(純度94.5%)の収率は29%であつた。

(21)

ましくない。意外にも、我々は固体懸濁液を噴霧乾燥またはフラッシュ乾燥すると菌体が十分に弱体化されて、別の固体破壊処理をしなくても*PHB*の抽出ができることを発見した。従つて水性固体懸濁液を噴霧またはフラッシュ乾燥してから抽出溶媒(*PHB*用)と接触させる場合には、特別の固体破壊処理は必要ではない。

本発明を以下の例によつて説明する(%)は重量%である)。

例 1 (比較)

この例は、単純な空気乾燥では効率的な*PHB*抽出を可能とするような充分な菌体の弱体化は達成されないことを示すものである。

メチロバクテリウム・オルガノフィラム(*NCIB* 11488; この詳細は我々の英国特許出願第7906078号)の水性懸濁液1000ml(60gのバイオマス固形分を含み、そのうちの86%が*PHB*)を遠心分離して湿潤菌体ペレットを得た。(NCIB番号は、スコットランド・アバーディーンのトーリー・リサーチ・ステーションの

(20)

収率は下記式で計算した。

$$\frac{\text{回収粗 } PHB \text{ 重量}}{\text{使用菌体乾燥重量}} \times \frac{100}{\text{菌体中の } PHB \%} \times 100$$

例 2

例1で用いた菌体の水性懸濁液5000mlを噴霧乾燥した。この際の懸濁液供給速度は5000ml/時、空気入口温度は150℃、空気出口温度は80℃であり、そして空気流量は800m³/時であつた。

噴霧乾燥菌体20gを1, 2-ジクロロエタン1000ml中に室温で15分間懸濁させた。菌体破片をウオットマン(*Whatman*)541濾紙で除去した。得られた溶液を5000mlのメタノール/水(4:1容)混合液に激しく攪拌しつつ添加して*PHB*を沈澱回収した。沈澱を濾紙で捕集した。粗*PHB*の収率は5.7%であつた。

上記の実験を繰返したが、乾燥菌体を1, 2-ジクロロエタンと共にシルバースン・ミキサー中で室温で15分間剪断した。粗*PHB*(純度98.2%)の収率は12.2%であつた。

(22)

上記の実験を繰返したが、乾燥固体を1, 2-ジクロルエタンによつて83℃で15分間還流処理した。粗PHB(純度93.6%)の収率は98.8%であつた。沈澱をメタノール500mlで5回洗浄し、106℃で乾燥した。洗浄PHBの純度は98.7%であつた。

例 3

例2で用いた噴霧乾燥固体の20gを600mlのアセトンで56℃において5分間還流して、脂質および色素を抽出し、ろ過によりアセトンを除去した。残留固体を1000mlの1, 2-ジクロルエタンと共にシルバーソニックサーター中で室温で15分間剪断した。得られた溶液をウオットマン541ろ紙で固体残渣から分離した。溶液に5000mlのメタノール/水(4:1)混合液を激しく攪拌しつつ添加することによりPHBを沈澱させ、その沈澱をろ紙で捕集した。粗PHB(純度96.7%)の収率は48.2%であつた。

上記の実験を繰返したが、アセトン抽出固体を1, 2-ジクロルエタンと共に剪断する代りにそ
(23)

ろ、そしてPHB抽出溶媒として1, 2-ジクロルエタンの代りにジクロルメタンを用いて例4を繰返した。PHB(純度98%)の収率は95%以上であつた。

PHB抽出溶媒としてクロロホルムを用いても同様な結果が得られた。

例 5

アゾトバクター・クロオコキウム(NCIB 9125)の培養株を、炭素過剰、酸素制限および基本塩濃度の条件下に水性培地中でグルコースの酸酵により製造した。固体懸濁液は20g/lのバイオマス固形分を含み、その固形分のPHB含量は40%であつた。次いで懸濁液を遠心分離により濃縮し80g/lのバイオマス固形分の固体クリームとした。

固体クリーム500mlを20℃の1, 2-ジクロルエタン1000mlに加え、シルバーソニック・ブレンダー・モデルL2Rにより10分間混合した。攪拌エネルギーにより温度が40℃に上昇した。得られたエマルジョンを冷却し、1.5℃で18000

(25)

のアセトン抽出固体を1, 2-ジクロルエタンで83℃において15分間還流処理した。粗PHB(純度98.4%)の収率は95%であつた。

従つて、アセトン抽出処理は冷1, 2-ジクロルエタンにより一層多くのPHBの抽出を可能にするように噴霧乾燥固体を弱化するけれども、噴霧乾燥処理単独でも沸騰1, 2-ジクロルエタンによりPHBの抽出が可能となる程度に固体を弱化させることが利する。しかしアセトン抽出処理は抽出されるPHBの純度を向上させる。

例 4

アゾトバクター・クロオコキウム(*Achromococcus*) (NCIB 9128)の水性懸濁液(60g/l)のバイオマス固形分を含み、その97.8%がPHB)を噴霧乾燥し、アセトン抽出し、還流下で1, 2-ジクロルエタンで抽出し、そして沈澱させた(例3と同じ条件)。粗PHB(純度98%)の収率は89.4%であつた。

例 5

脂質抽出溶媒としてアセトンの代りにメタノー
(26)

で15分間遠心分離した。水性溶液および固体破片よりなる上方層をデカンテーションで除いた。PHBを溶解して含む1, 2-ジクロルエタンよりなる下方層を5000mlのエタノール/水(4:1容)混合液中へ激しく攪拌しながら徐々に注ぎ込んだ。

かくして得られた沈澱PHB(純度97.5%)をろ過で捕集し、メタノール1000mlで5回洗浄し、減圧下に50℃で乾燥した。これを化学分析したところ下記の組成(%)を有した。

C 55.8, H 7.0, O 37.0,

N < 0.2 (理論値: C 55.9, H

6.9, O 37.2)。この値は99.5%

以上の純度に相当する。固体PHBは繊維状の風合であつた。収量は14.7g(収率92%)であつた。

比較のために抽出溶媒としてクロロホルムを用いて上記の操作を繰返したとき、収量は16.6gであつたが、純度(メタノール洗浄前)はわずかに88.6%であつた。

(26)

例 7

水性培地中でメタノール酸酵により作り、20 g/ℓの全バイオマス固形分（そのうち28%がPHB）を含むシュードモナスAM1（NCIB 9133）の菌体の水性懸濁液を、例6の方法により1, 2-ジクロルエタンと接触させて抽出したが、この場合には濃縮して12.0 g/ℓのバイオマス固形分を含む菌体クリームとした後に、菌体をダイノミル（Dynomill）で破砕した。この時の処理速度は15 ℓ/時であり、入口温度20℃、出口温度40℃であつた。

得られたPHBの純度（メタノール洗浄前）は93.2%、収率は77%であつた。

例 8

例1で用いた菌体の水性懸濁液を遠心分離で120 g/ℓのバイオマス固形分を含む菌体クリームとしたものを用いて例7を繰返した。粗PHB（純度93.2%）の収率は68.8%であつた。この収率の水準は、分離した下方層がわずかに750 mlの容量であつたこと（すなわち1, 2-ジクロ

(27)

例9を繰返したが菌体クリームのpHを種々の値に調節してから、そのクリーム状エマルジョンを1, 2-ジクロルエタンと接触させた。80分および60分間静置したときに分離する1, 2-ジクロルエタン溶液の量は下表の通りであつた。

pH	分離した1, 2-ジクロルエタンの容量(ml)	
	30分後	60分後
4	0（安定エマルジョン）	30
4.5	410	—
5	650	770
5.5	640	—
6	290	700
7	170	420
8	60	800
9	50	270
10	30	—

菌体クリームの等電点を測定したところ、pH 5であつた。

例 11

(29)

ルエタンのわずかに75%がエマルジョンから分離されたにすぎなかつたこと）によるものである。もしすべての1, 2-ジクロルエタンが分離されていたとすれば、計算によるPHB収率は約85%であつた。

例 9

例6を繰返したが、この場合は菌体クリーム（pH7、培養後数週間貯蔵）と1, 2-ジクロルエタンをシルバーソンプレンダー中で混合した後、エマルジョンを冷却し遠心分離で分離する代りに自然重力下で80分間静置した。この時間中にエマルジョンは菌体破片を含む上方層と、PHB含有1, 2-ジクロルエタン溶液の下方層とに分離した。回収した下方層の容量はわずかに170 mlであつた。1時間放置した後でも、分離下方層の容量はわずかに420 mlであつた。この系（pH7）で迅速な分離を達成するには、エマルジョンを冷却し、15℃で15分間遠心分離する必要があつた。

例 10

(28)

ナゾトバクター・クロオコキウム（NCIB 9123）のpH5の等電点を有する新たに培養した菌体クリーム（約40%のPHBを含む）を用いて例9を繰返した。pHを5に調節してから菌体クリームを1, 2-ジクロルエタンと接触させた。自然重力下でわずかに10分後に水性層と1, 2-ジクロルエタン層とが迅速に分離し、850 mlの1, 2-ジクロルエタン層が分離し、回収できた。例6のようにしてPHBを沈殿させ、洗浄した。PHB（純度99.5%）の収率は84%であつた。

例 12

pH7.0の水性培地中でメタノールの好気酸酵によりシュードモナスAM1（NCIB 9133）の菌体水性懸濁液を作つた。この液は20 g/ℓの全バイオマス固形分（80%がPHB）を含んでいた。この液を遠心分離で濃縮して80 g/ℓのバイオマス固形分の菌体クリームとした。これをダイノミルで破砕して菌体を破壊した。処理速度は12 ℓ/時であり、入口温度20℃、出口温

(30)

度40℃であつた。得られた破膜固体の等電点はpH 4.7.5であつた。

破膜固体の懸濁液のpHを4.7.5に調節し、この懸濁液の500mlを1gの1,2-ジクロルエタンに添加した。この混合物をシルバーソンプレンダー・モデルL2Rを低混合速度で用いて10分間混合した。得られたエマルジョンを静置した。

10分後に800mlの1,2-ジクロルエタンが分離していた。次いでPHBを例6の方法で1,2-ジクロルエタンから分離した。PHB収率は78%であつた。

pH調節を全く行なわずに上記実験を繰返したときに、破膜固体懸濁液および1,2-ジクロルエタンの混合の際に、比較的安定なエマルジョンが形成され、このものは遠心分離したときだけに分離した。

例 12

抽出溶媒としての種々の溶媒の有効性を比較するために、500mlのアゾトバクター・クロオコ

(31)

溶 媒	冷 抽 出				還流抽出	
	回収溶媒 (%)		シロップの固形分含量 (%)		シロップの固形分含量 (%)	
	30分	60分	全	PHB	全	PHB
1,2-ジクロルエタン	55	75	1.15	0.89	1.82	0.92
クロロホルム	0	0	1.27	0.92	1.85	0.95
ジクロルメタン	12	35	1.51	0.95	1.07	0.69
1,1,1-トリクロルエタン	45	60	0.8	ND	0.85	ND
1,1,2-トリクロルエチレン	45	50	0.12	ND	0.22	ND
1,1,2,2-テトラクロルエタン	85	90	0.01	ND	0.05	ND
ピリジン	0	0	0.01	ND	-	-
1,2-プロピレンカーボネート	8	15	0.01	ND	ND	ND

ND=測定

※ 静置に際し分離が不良のため、エマルジョンを遠心分離して、全固形分およびPHB含量測

(33)

キウム(NCIB 9125)の固体クリーム(バイオマス固形分含量50g/g; pH 5.0)を、被試験溶媒1gに20℃で注ぎ込んだ。得られた混合物をシルバーソンプレンダー(モデルL2R)で10分間混合し、重力下で分離させた。80分および60分後に分離した溶媒の量を測定した。分離後、溶媒層(ここではシロップと称する)をサイフォンで取出し、その固形分を試料の蒸発乾固により測定した。シロップのPHB含量は例6のような水/メタノール混液中での沈降により測定した。

シルバーソンプレンダーでの混合の代りに還流条件下で15分間成理することにより上記の操作を繰返した。結果を下表に示す。

(32)

定のためのサンプルを得た。

種々の溶媒中におけるPHBの溶解特性を調べるため、冷抽出で得られた沈降PHBのクロロホルム、ジクロルメタンおよび1,2-ジクロルエタンによる再溶解を、各別量の冷溶媒と乾燥後の沈降PHBとを混合することにより試みた。沈降PHBは冷クロロホルムまたは冷ジクロルメタンには再溶解したが、冷1,2-ジクロルエタンには溶解性でなかつた。

特許出願人 インベリヤル・ケミカル・インダストリーズ・リミテッド

代理人 井理士 湯 浅 恭 三

(外2名)

(34)

第1頁の続き

優先権主張 ②1979年2月21日③イギリス
(GB)④7906077

③1979年5月8日③イギリス
(GB)④7915858

⑫発明者 バリー・アルダーソン
イギリス国クリーブランド・ス
トックトン・オン・テース・
ノートン・ザ・グリーン・ノー
トン・ホール(番地なし)

⑬発明者 ピーター・ジェームス・セニア

イギリス国クリーブランド・ス
トックトン・オン・テース・
ノートン・ザ・グリーン・ノー
トン・ホール(番地なし)